

洞 内 説 明

岩 本 琢 磨
水 島 淳

堅穴である千里洞は直径 $60\text{ m} \times 50\text{ m}$ のドリーネの底にボガウウBogazから 10 m 程の高みにある直径 $10\text{ m} \times 20\text{ m}$ の洞口、ここにワイヤーバシゴを設置する。ピンを打った地点がもはや洞内である。周囲には約 40 m の垂直の石塔原 (Kanenfelt) に覆われているので、洞内から吹き上げる冷気で洞口附近には9月頃まで残雪があるが、この殺風景な辺りを高山植物が咲き、心を慰めてくれる。

このピンから -60° 〜 -90° の角度で堅穴が南南東の方向に 65 m 続く。梯子を下つていくのであるがA〜A'は落葉が腐敗し、堆積しているがその下部には浮石がぎつしり溜っている。一見、おとなしそうなこれらの石も、ザイルが触れただけで人間を狙う弾丸と化する。また、1箇所オーバーハングになつているところでは苦勞するものである。このオーバーハングの所より地下水がみられる。

梯子を下り終ると幅 $30\text{ m} \times$ 長さ 70 m のオーホールが -45° 〜 -60° の傾斜をもつて南東の方向に横たわっている。ホールいつばいに大きな雪溪が埋まつているため、気温 3°C 、水温 4°C と冷蔵庫の如く洞内に冷気を漂わせている。雪溪の横を朽木を足場に 40 m 下ると支洞の入口だ。チムニーが6つばかりあるが簡単に登り降り出来る。チムニーの3つ目からチヨロチヨロと水が流れ始める。最後のチムニーから 5 m もあり、ハングになつているからクレモナ梯子で下る。足元には $30\text{ cm} \times 30\text{ cm}$ 大の石がごろごろしている。このオ二ホールはオーホールとつながっている。この地から南東の方向に下つていくと天井から滝が地面をたたく。ヘッドランプをあてると七色に

水がきらめく。西南西に急なカーブを描き4つの滝を下ると、最大の難関である70mの垂直の壁に至る。この地点は幅2mの地面いつばい地下水が壁に飛び込んでいく。その流れの中にワイヤーバシゴが取り付けられている。頭から全身冷水シャワーを浴び、顔に水の弾丸の直撃を受ける。下の方になると徐々に加速度を増し、悲壮感を帯びてくる。目を半分閉じて壁を見つめること数分。底に達するとそのホールにシャワーを浴びせかけている。ホールはおわんをふせた様な状態で、ハシゴは中央から垂れさがっている。そして同時にこのおわんの所々から水もれがしている。ホールは100m×40mの大ホール。高さは見当もつかない。地面は才2ホールと同様に石がゴロゴロしている。才三ホールの真中は幾分高くなっており砂山がある。ホールの隅には4つの支洞があるが、3つは行き止りである。ところが、梯子で下った地点から南西の方向50mの所に人1人が匍匐前進してもぐり込める穴が開いている。水はなく、 $-25^{\circ}\sim+25^{\circ}$ と辿つて出た所は、幅5m高さ7m程の横穴で西や南に曲りくねり進んでいる。支洞でなく、福来ケ口に抜ける(推定)本洞だ。100mもいくと10m~20mの才4ホールに達する。途中支洞が1本あるが、本洞へぐるとまわるだけである。この才4ホールにては落盤の下を10mのチムニーの堅穴をくぐると、北に方向を急変し、その傾斜も -35° と堅穴の様子を呈している。足元は6m大の直径をもつ落盤で埋つている。50mも進むとまた堅穴になる。この穴の直径は50cmそこそこだ。石を落すとガンガンと音をたてる。テラスが多い。約40mの堅穴だ。また、どこから現われたか、水がその穴に滝水となつて吸い込まれていく。この才4ホールは横穴が続いていたせいか、寒さを感じさせない。この洞窟は体力への挑戦だ。

「青海千里洞」の雪 状態の考察

三 戸 忠 弘

日本の洞窟記録の中で洞内雪溪について考察されている記録を認めた事はない。それ故洞窟内の雪溪存在は極めて稀な記録である。

過去の洞窟活動の中で洞内温度の低下により洞内流水の凍結の結果形成されたアイス・フロー(ICE FLOW)やアイス・レイク(ICE LAKE)の存在は横穴洞・堅穴洞の区別なく認め得た。それらの形成過程と「千里洞」内に存在する雪溪(Snowy ralley)の形成過程とは本質的に相違するもので、その比較対照は不可能である。その存在時間もアイス・フローやアイス・レイクは冬期の期間に限定され、一方雪溪はフォー・シーズン(four seasons)多少変化をしながら存在する。それ故雪溪は洞窟温度の変化のみに左右され形成されるものではないし、その形成過程も洞窟自体の状態や、洞窟の地理的条件、洞内気温により相対的に差違のある形成過程を示すものである。この前提を基にして「青海千里洞」の雪溪について、その形成過程を考察する。

この洞窟の存在する地理的地点は、日本でも有数の降雪量の多い条件下に位置している。しかしこの降雪量条件にのみ原因があるのではなく、この降雪が如何に洞内に入り、地下約100mの地点に雪溪を形成したかを決定づける条件は、洞口附近の地形的条件である。ここに示される 図1によりその条件を説明する。